宮古市文化財保存活用地域計画

概　要　版

～森・川・海の時空をつなぐ「ふるさと宮古」の創造～

宮古市教育委員会

北上山地と三陸海岸に育まれた森・川・海の歴史文化

～～宮古市の歴史文化の特性～～

宮古市は北上山地に位置し、その最高峰である早池峰山など豊かな森林資源に恵まれ、北上山地の山々を源とする閉伊川とその支流に集落が形成されてきました。

そして、浄土ヶ浜に代表される名勝地、宮古湾と太平洋からなる三陸海岸の水産資源に恵まれて、生活を営んできました。

私たちの先人の歴史文化は、「森・川・海」の３つのステージに展開されてきたといえます。

地域の宝

黒森神楽

牧庵鞭牛道供養碑

チョウセンアカシジミ

三王岩

崎山貝塚

浄土ヶ浜

暦応の碑

田代念佛剣舞

ハヤチネウスユキソウ

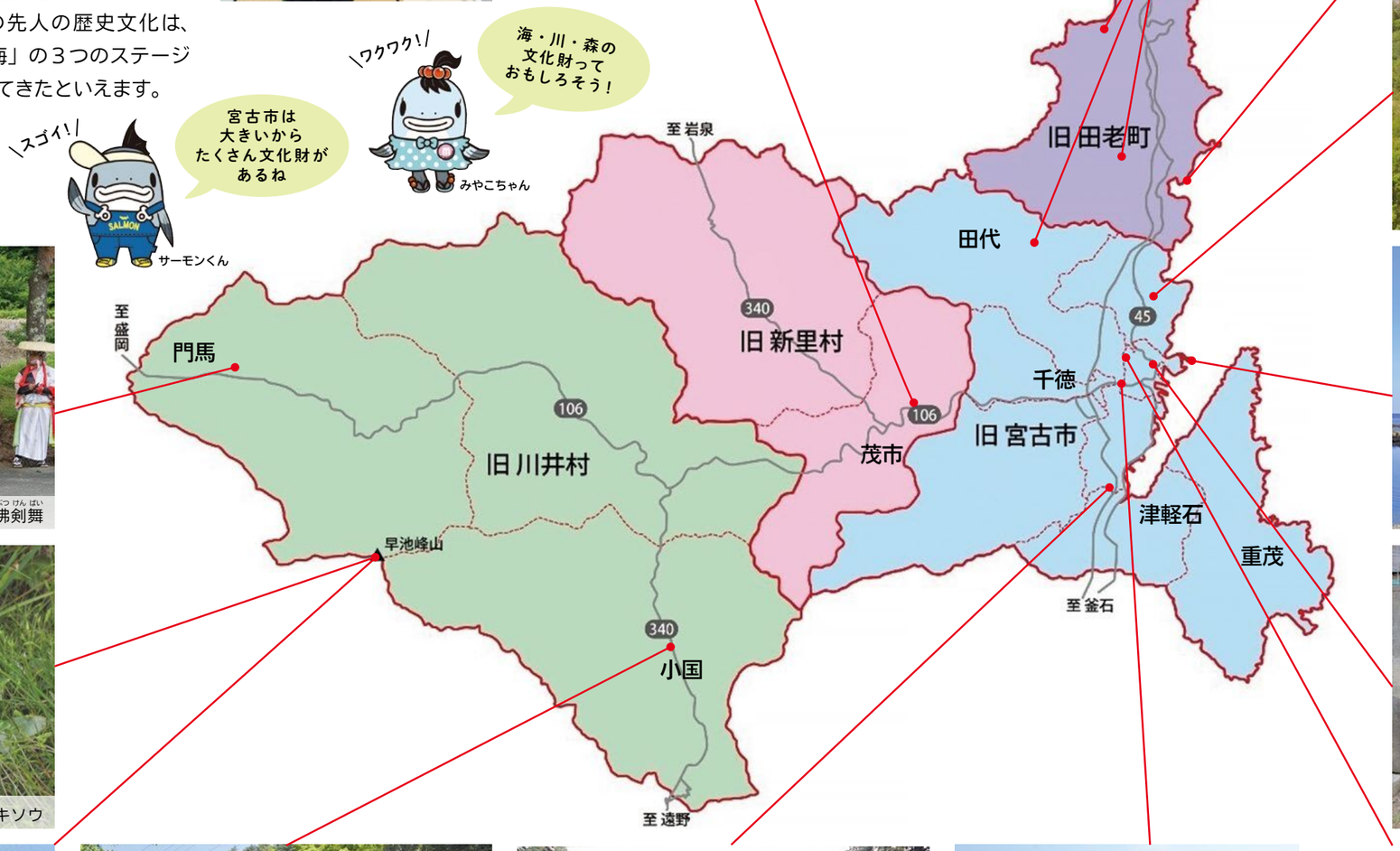
早池峰山

寺院 大圓寺

盛合家住宅主屋
および盛合氏庭園

公孫樹

旧東屋酒造店



概要版に掲載されている文化財の詳しい内容については
サーモンくんをタップ↓

『宮古物語』～歴史文化を振り返り地域の魅力再発見～

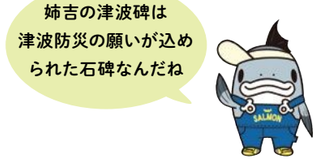
宮古市の歴史文化を５つのテーマでまとめて紹介します。テーマやストーリーにそって５つのまとまり（関連文化財群）を設定し、短編集『宮古物語』としました。

第１話 三陸海岸の景観と津波の伝承

宮古市がある北上山地北部の地層は、３億年以上前に赤道付近の深海で堆積した岩石でつくられています。その後、陸地となり一部が沈降して、１億１千万年前に浅い海で堆積した地層が宮古層群です。地層の隆起や海水面の変動による侵食が進み、「崎山の蝋燭岩・潮吹穴」や「日出島」、「三王岩」といった美しい景観が生まれました。「摂待大島」では、地層からサンゴや巻貝、アンモナイトなどの化石が産み出されています。また、「浄土ヶ浜」の白い岩は、４千４百万年前に地下でマグマが上昇してできた流紋岩です。

姉吉の津波碑

三陸の海は、自然の恵みを与えてくれる一方で、くり返し津波となって襲いかかってきました。1896（明治 29）年と 1933（昭和８）年の三陸地震津波に襲われ、「三陸は津波の常襲地帯」と言われました。以後、重茂地区姉吉の津波碑のように「ここより下に家を建てるな」といったメッセージが刻まれた、大津波記念碑が建立されるようになりました。現在は、田老地区の観光ホテルと防潮堤が津波遺構として保存され、学ぶ防災ガイドが津波防災の大切さを伝えています。



第２話 自然の恵みと共に生きる縄文文化～貝塚と遺跡～

崎山貝塚からは、岩礁に生息するアイナメ・タナゴ、外洋性のマグロやカツオなどの大型回遊魚からイワシなどの小魚まで、約 40 種の魚類の骨、オットセイやクジラの骨も確認されています。大量のウニの殻や棘が出土していることも大きな特徴です。これらの海の恵みを獲得するために、ニホンジカの角や骨を利用して、釣り針や擬餌針、銛頭などの骨角器が作られました。こうした縄文時代の漁具の基本的な形状は、現代とほとんど変わらず、素材は金属へと移り変わりました。縄文時代の技術が、現代の漁業で使っている道具へと継承されています。

左：崎山貝塚から出土した骨角器
右：近内中村遺跡出土巻貝形土器

近内中村遺跡からは、全国的にも希少な巻貝形土器の完形品が出土しています。本物の巻き貝をまねて作り、何らかの祈りの儀式（祭祀儀礼）に使われたと考えられます。大小の石を並べた配石遺構は祈りの場で、クマの牙の装飾品や獣骨が多数見つかっています。墓も多く、香炉形土器や注口土器など葬式に使われる特別な土器が出土しています。近内中村遺跡に代表される縄文遺跡からは、自然豊かな環境の中で育まれた縄文人の祭りや精神文化をうかがい知ることができます。

◆一体的・総合的な取り組み①　関連文化財群『宮古物語』

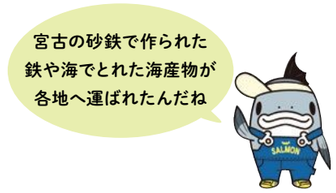
様々な文化財を関連文化財群としてまとまりをもって扱うことで、相互に結び付いた価値や魅力を発見することができます。ストーリーとして本市の歴史文化の特徴や魅力をわかりやすく市内外に発信し、教育や観光・交流の促進につなぐことを目指します。

第３話 河川流域に展開した古代エミシと中世土豪の世界

宮古市では奈良時代から平安時代、中世にかけて、たたら製鉄による鉄生産が盛んに行われました。鉄の原料となる砂鉄が採取でき、豊かな森林により木炭が生産できたからです。蝦夷の権威を示す蕨手刀や戦いに不可欠な鏃・馬具、さらに刀子・斧などの日常生活用具、草刈鎌・穂積具などの鉄製品が遺跡から多数出土しています。遠隔地で生産された須恵器や陶磁器、中国産陶磁器なども出土しており、鉄と昆布・塩などの海産物が古代の交易品としては重要であったと考えられます。

長根古墳群出土品

鎌倉時代には、閉伊氏が鎌倉幕府の地頭として当地方を治め、室町時代には、山口館や千徳城、田鎖館などの大規模な城館の領主が、周辺の城主を従えていました。河川流域の城館を核に集落や村が形成されたことから、氏名と地名が一致している地区があります。



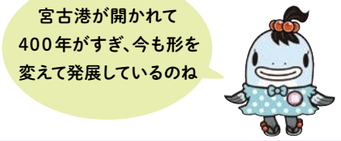
第４話 三陸海岸の恵みと港町宮古

岩手県沿岸部のほぼ中央に位置する宮古地方、その発展の原動力となったのは天然の良港と豊富な海産物という海の恵みでした。江戸時代になると、太平洋岸の海運で江戸との交易が可能となり、海産物が江戸へ運ばれました。宮古港（鍬ヶ崎浦）は江戸・松前（北海道）間の寄港地となり、代官所が設置された宮古町と共に、廻船問屋などの大店や蔵、旅籠や船宿、料亭が立ち並ぶ領内一の繁華地となります。

黒森神楽

盛岡城下と宮古港を結ぶ北上山地の河川沿いが街道となり、海と山が結ばれることによって木材や鉄も送り出されました。幕末維新に起きた宮古港海戦も、宮古港が海上交通において重要な港湾であったことを物語っています。

明治以降の港湾の重要性が高まるなかで、閉伊川河口と海岸の埋立てによる築港が行われ、東京・函館をむすぶ三陸汽船が就航しました。戦後も海上交通と遠洋漁業が発達し、本市は岩手県沿岸の中核都市へと発展を遂げていきました。

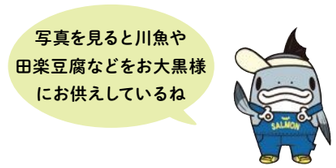


第５話 早池峰山麓の暮らしと祈り

私たちの祖先は、住居をはじめ生産・生活道具のほとんどを樹木や樹皮から生み出してきました。山里の生活は、焼き畑で雑穀を栽培して主食とし、山菜や木の実を利用する知恵と技術を伝承してきました。北上山地の豊富な山林資源は、炭焼きや木材の生産に利用され、近代には鉄道の枕木が生産されました。厳しい山里に生きるため、「結」とよばれる共同作業が行われました。

お大黒様のお供え

北上山地の最高峰、早池峰山は、修験者らによる山岳信仰の霊山であるとともに、山麓の里に暮らす人々からも信仰を集めてきました。豊作を祈る「農神」であり、漁民にとっては航海の目印として、山仕事を守る「山の神」として信仰されました。こうした人々の願いが、神楽などの民俗芸能にこめられています。



文化財保存活用区域の宝マップ

今後は文化的に結びつきのある９つのエリアで、まだ残る地域の宝を地域の皆さんと協働でリサーチし、文化財を巡るための周遊マップを作ります。

森

F 新里区域 ～牧庵鞭牛と鳥取春陽を生んだ山里～

和井内の農家に生まれた牧庵鞭牛は、宝暦年間（1751-63）に閉伊街道の道路改修に努め、民衆の救済に尽くしました。

刈屋出身の鳥取春陽は、大正期のヒット曲「籠の鳥」の作曲者で、日本で初めてレコード会社と専属契約を交わした作曲家です。

●主な文化財

牧庵鞭牛道供養碑、大日如来像、応永石塔婆碑など

牧庵鞭牛道供養碑

G 川井区域 ～山里の暮らしと宮古街道～

閉伊川流域を通る宮古街道は、盛岡へ海産物などが馬で運ばれ、一里塚も残されています。かつては宿場にもなっていました。北上山地民俗資料館に山里の仕事と暮らしに関する国指定重要有形民俗文化財が保存公開されています。

●主な文化財

北上山地川井村の山村生産用具コレクション、南部木挽唄、早坂の一里塚

北上山地民俗資料館

H 小国区域 ～早池峰山信仰の山里～

1395(応永２)年に月泉良印が開山した大圓寺、修験善行院や神社を核として多くの民俗芸能が伝わる区域です。江戸期の主要港大槌港、遠野城下へつながる交通の要衝でもありました。遠野物語の舞台や伝説にまつわる地名も多く残されています。

●主な文化財

寺院大圓寺、江繋早池峰神楽、大梵天館跡など

江繋早池峰神楽

I 門馬区域 ～北上山地の大自然に抱かれて～

北上山地の最高峰早池峰山区界高原を核とする区域で、宮古市を代表する大自然が残されています。区界高原は北上山地が隆起する以前のなだらかな地形が分布しています。高山植物と希少な動植物などの自然環境が魅力の区域です。

●主な文化財

早池峰山及び薬師岳の高山帯・森林植物群落、田代念仏剣舞など

北上山地

B 田代区域 ～交通の要衝となった山里～

宮古町から北へ向かう街道（中北通）により、自動車が普及するまでは田老、岩泉の町に通じる交通の要衝でした。

氷河期に大陸から渡ってきたチョウセンアカシジミの保護活動が、地域・学校と連携して行われています。

●主な文化財

絵入り追分道標、鰐口、田代念仏剣舞、チョウセンアカシジミなど

チョウセンアカシジミ

川

D 千徳・花輪区域 ～中世の館と殿様誕生の地～

千徳城跡、田鎖館、根城館をはじめ河川流域に中世土豪の館跡が多く残されています。第４代盛岡藩主南部重信の生誕地で、「花輪殿様」にまつわる神社と民俗芸能が残っています。長沢川上流域には牧庵鞭牛にまつわる道供養碑と史跡がまとまって存在しています。

●主な文化財

根城館跡、鞭牛碑群、花輪鹿子踊り、十三仏と岩屋など

E 津軽石・重茂区域 ～鮭とワカメ・昆布の里～

津軽石は、江戸時代から「南部鼻曲り鮭」で知られ、鮭に関わる地名や伝説が残されています。

重茂は、昔は典型的な半農半漁の漁村でした。昭和40年代からワカメの養殖が始まり、三陸随一の水揚げ量と品質を誇ります。

●主な文化財

盛合家住宅主屋、津軽石さんさ踊りなど

根城館跡

A 田老区域 ～津波防災のまち～

1933（昭和８）年の三陸地震津波後に建設された田老防潮堤が有名で、行政と住民が継続して津波防災に取り組んできた地域です。

「三王岩」の周辺に宮古層群に関連するジオサイトがあり、観察会が行われています。

●主な文化財

三王岩、元禄碑、摂待七つ物、たろう観光ホテル、樫内の駒止桜など

盛合氏庭園

浄土ヶ浜

C 宮古区域 ～三陸の恵みが育んだ港町～

黒森神社と黒森神楽は、中世から現在までの資料が残されています。宮古・鍬ヶ崎地区は、江戸時代から「南部の宮古港」としてにぎわい、戊辰戦争で宮古港海戦が行われました。明治以後、港湾が整備され、水産業のまち、岩手県沿岸の中核都市に発展しました。

●主な文化財

黒森神楽、浄土ヶ浜、官軍勇士の墓、公孫樹、旧東屋酒造店など

黒森神社

◆一体的・総合的な取り組み②　文化財保存活用区域

自然環境や指定等文化財、未指定文化財などが結びついた、文化的な空間として９つの区域を設定しました。地域の皆さんと協働で「地域の宝マップ」作り等に取り組みます。地域住民や関連施設と連携を図りながら「地域の宝さがし」調査を行い、未指定文化財や名勝地、区域内施設と体験型観光メニューなどを盛り込んだ「地域の宝マップ」を作成します。区域内の文化財や地域の宝を巡る周遊ルートを設定して見学会を実施し、案内や解説の表示板について検討し設置に取り組みます。

海

宮古市文化財保存活用地域計画とは

宮古市は「森・川・海」の豊かな自然環境を有し、現代まで特徴ある歴史や文化を形成してきました。しかし、少子高齢化や自然災害の頻発等により、文化財を含む歴史や文化の継承が難しくなってきています。

宮古市の歴史文化を着実に次世代へ伝えるため、文化財の保存と活用の事業を計画的に実施していく「宮古市文化財保存活用地域計画」を作成しました。

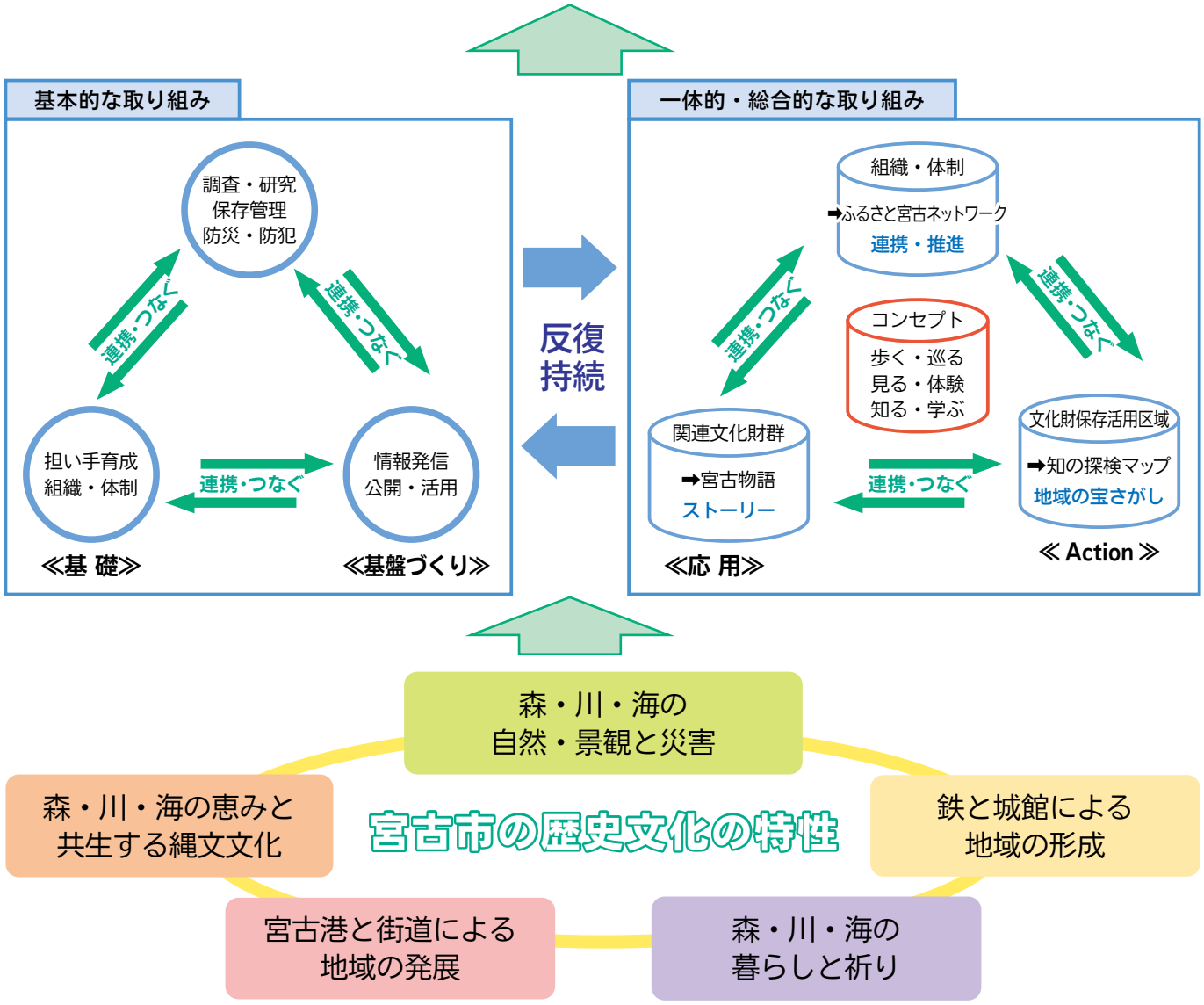
計画期間

令和６年度
（2024 年）
▼
令和 11 年度
（2029 年）
【６年間】

◆文化財の保存と活用に関する概念図

目標：森・川・海の時空をつなぐ「ふるさと宮古」の創造

森・川・海に育まれた歴史文化を現在・過去・未来の時空のなかでつなぎ、愛着と誇りを持てる「ふるさと宮古」の創造を目指します。



「宮古市文化財保存活用地域計画」概要版

令和７年３月発行

発行：宮古市教育委員会　編集：宮古市教育委員会事務局 文化課

〒027-0097 岩手県宮古市崎山第１地割16番地１　TEL：0193-65-7526

「宮古市文化財保存活用地域計画」の本文は
みやこちゃんをタップ➡